

ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳「車輪の下」新潮文庫、新潮社 1951年12月20日刊を読む

## ハンスの夏休み

1. 夏休みはこうなくてはならない。山々の上にはリンドウ色に青い空があった。幾週間もまぶしく暑い日が続いた。ただときおり激しい短い雷雨が来るだけだった。川はたくさんの砂岩やモミの木かげや狭い谷のあいだを流れていたが、水があたたかくなっていたので、夕方おそくなってもまだ水浴びができた。小さい町のまわりには、干草や二番刈りの草のにおいがただよっていた。細長い麦畑は黄色く金褐色になった。あちこちの小川のほとりには、白い花の咲くドクゼリのような草が、人の背ほども高く茂っていた。その花はかさのような格好で、小さい甲虫<sup>かぶとむし</sup>がたえずいっばいたかっていた。その中空の茎を切ると、大小の笛ができた。森のはずれには、柔らかい毛のある、黄色い花の咲く、堂々としたピロウドマウズイカが長くきらびやかに並んでいた。ミソハギとアカバナ属が、すらりとした強い茎の上でゆれながら、谷の斜面を一面に紫紅色におおっていた。モミの木の下には、高くそそり立つ赤いジギタリスが厳粛に美しく異様にはえていた。その根生葉には銀色の柔らかい毛があつて幅が広く、茎が強く、萼上花<sup>がくじょうか</sup>は上のほうに並んでいて美しい紅色だった。そのそばにさまざまな種類のキノコがはえていた。つやのある赤いハエトリタケ、肉の厚い幅広いアワタケ、異様なバラモンジン、赤い枝の多いハハキタケ、など。それから一風かわって色のない、病的にふとっているシャクジョウソウ。森と草刈り場のあいだの雑草のはえた境のところには、強いエニシダが真っ黄色に輝いていた。それから細長い薄むらさきのミネズホウ。それからいよいよ草刈り場。そこはもう大部分二度めの草刈りを前にして、タネツケバナ、センノウ、サルビア、松虫草などがはなやかにおいしげ<sup>かつようじゅ</sup>っていた。闊葉樹<sup>かつようじゅ</sup>の林の中ではアトリがたえ間なく歌っており、モミの林ではキツネ色のリスがこずえのあいだを走っていた。道ばたや壁のそばや、かれた堀では、緑色のトカゲがあたたかさに気持ちよさそうに呼吸しながら、からだを光らしていた。草刈り場をこえてずっと向うまで、かん高い、うむことを知らぬセミの歌が響きわたった。
2. 町はこの時節には農村めいた感じを濃くした。干草車や干草のにおいや大カマの刃をつける音が往来や空中を満たした。二つの工場がなかったら、まったく村にいる思いがしただろう。
3. 休暇の第一日の朝早く、アンナばあやが起き出しもしないうちから、ハンスはもうじれったように、台所につつ立って、コーヒーのできるのを待った。彼は火をおこすのを手伝い、はちからパンを取って来、新しい牛乳で冷たくしたコーヒーを大急ぎで飲み下し、パンをポケットにつっこんで、駆けだした。上手の鉄道の土手のところで止り、ズボンのポケットから丸いブリキの入れ物を引き出し、一生懸命にバツタを捕え始めた。汽車が走り過ぎた——が、勢いよく走って行きはしなかった。そこは線路が急なのぼりになっていたもので、ゆっくりと走った。汽車は窓をすっかり明け放し、わずかの乗客を乗せ、蒸気と煙を長くうしろにのどかにたなびかして行った。ハンスはそれを見送り、白い煙がうずを巻いて、やがて早朝の澄んだ晴れた空に消えるのをながめた。どんなに長いあいだこうしたいろいろのものを、彼は見ずにすごしたことだろう。彼はおおきく呼吸をした。失った美しい時をいま、二倍にして取り返し、なんの屈託も不安もなく、もう一度小さい少年に戻ろうとするかのように。
4. バツタを入れたカンと新しい釣りざおを持って、橋をこえ、うしろの菜園を通過して、川のいち

ばん深い馬洗い場に歩いていく道々、ハンスの胸は、ひそかな歓喜と魚釣りの快感に高鳴った。そこには、柳の木にもたれて、どこよりもらくにじゃまされずに魚釣りのできる場所があった。彼は糸をのばして、小さい鉛のかたまりをつけ、太ったバツタを無慈悲に針につきさし、勢いよく遠く川のまんなかに投げた。古くなじんだ遊戯が始まった。小さいフナがたくさんえさのまわりに群がって、針からえさをちぎり取ろうとした。まもなくえさはくいつくされてしまった。二番めのバツタがつけられた。それから、もひとつ、続いて四番め五番めと、しだいに念入りにえさを針につけた。やがて、もひとつ鉛のかたまりを糸につけて重くした。ようやくいちにんまへの魚がえさをつつきだした。その魚はちょっとえさをひっぱってから、離し、またためした。それからくいついた——よい釣り手なら、糸とさおを伝わって指にびくっと来るのを感じるものだ。ハンスはわざとひとつき突いてから、慎重にひっぱり始めた。魚はくいついていた。見えるようになる、それはウグイであることがわかった。淡黄色に光る幅広のからだ、三角の頭と、とりわけ美しい肉色がかった腹びれによって、すぐ見分けがついた。どのくらいの重さがあるだろう？だが、それを積ってみることができないうちに、ウグイは死にももの狂いにはねかえり、おびえながら水面をぐるぐるっと泳いでから、逃げてしまった。ハンスは魚が水の中で三、四回旋回してから、銀色の閃光せんこうのように水の底に消えていくのを見た。くいつき方が悪かったのだ。

5. 釣り手にはいよいよ魚釣りの興奮と熱情的な精神集中が目ざめた。彼のまなざしは鋭くじっと細い褐色の糸が水に触れているところに注がれた。彼のほおは真っ赤になり、彼の動作はきびきびとすばしこく的確だった。二度めのウグイがくいついて、引き上げられた。それから小さいコイ。小さいのが残念だった。それから、続けざまにハゼを三匹。この魚は父親の好物だったので、特に少年を喜ばした。これはせいぜい手さきほどの長さになるもので、うろこの小さい脂ぎったからだをしており、分厚な頭にはおどけた白いひげおかがあり、目は小さく、後半身はすらりとしていた。色は緑と褐色のあいだで、陸に上げられると鋼色はがねを帯びた。
6. そのうち、日は高く上がり、上手のせきの水のあわは真っ白に光り、川の上にはあたたかい微風がふるえていた。見上げると、ムックベルクの上に、手のひらほどのまぶしい小さい雲が二つ三つ浮かんでいた。暑くなった。青空の中ほどに二つ三つじっと白く浮んで、長いあいだ見えないほど光をいっぱい吸いこんでいる静かな小さい雲くらい、晴れた真夏の日の暑さをよく現わしているものはない。そういう雲がなかったら、どのくらい暑いかを気づかぬことが多いだろう。青空でも、きらきら光る川面かわもでもなく、丸くかたまつた真っ白い真昼の雲を見ると、たちまち太陽のやきつづのを感じ、日かげを求め、汗にぬれた額の上に手をかざすのである。
7. ハンスはしだいに釣り針をあまり注意しなくなった。少し疲れてきた。それにどっちみちお昼ごろにはほとんどなんにも釣れないのが常だ。銀色ウグイは、いちばん年をくって大きいやつも、お昼には日なたぼっこするため上のほうに浮いて来る。彼らは大きい黒い列をなし夢みるように水面すれすれに上手へ向って泳ぐ。そしてときどきはっきりした理由もなく急に驚くのだった。この時刻には彼らは針にかからない。
8. ハンスは糸を柳の枝ごしに水の中にたらしただまま、地面に腰をおろして、緑色の川を見た。徐々に魚が上に浮いて来た。黒い背中が順々に水面に現われた。あたたかさに誘い出され陶然として、ゆっくり泳ぐ静かな魚の群れ。水があたたかいので気持ちがいいに違いない。ハンスは編み上げぐつをぬいで、足を水の中にたらしただ。水の表面はまったくなまぬるかった。彼は釣り上げた魚をながめた。魚は大きなジョウロの中にじっと浮んでいた。ときどき軽くはねるだけだった。なんと美しい魚だろう。動くごとに、白、褐色、緑、銀、つや消しの金、その他の色が、うろことひれのところに輝いた。

9. まったく静かだった。橋を渡る車の音もほとんど聞えなかった。水車のがたがた鳴る音もここではごくかすかに聞えるだけだった。白くあわ立つせきの穏やかなたえ間ないざわめきだけが、平和に涼しく眠たげに響いて来た。それから、いかだのくいに水があたってぐるぐるまわる低い音がした。

10. ギリシャ語もラテン語も、文法も文体論も、算術も暗記も、長いおちつかないあくせくした一年の苦しい不安も残らず、眠たい暑いこのひとときの中に静かに沈んでしまった。ハンスは少し頭痛がしたが、いつものようにひどくはなかった。いまは昔のように川ぶちにすわることができるのだ。彼はせきのところで水のあわが飛ぶのを見、釣り糸のほうを目を細くしてうかがった。そばのジョウロの中では、釣り上げた魚が泳いでいた。なんともいえないいい気持ちだった。ときどき、自分は州の試験に通ったのだ、二番になったのだ、という考えが、だしぬけに頭に浮んだ。すると、彼は素足で水をばちやばちやいわせ、ズボンのポケットに両手をつっこんで、口笛でメロディーを吹き始めた。彼はほんとにちゃんと口笛を吹くことができなかった。それは昔からの嘆きであり、そのために学校友だちからこれまでさんざんからかわれた。彼は歯のあいだから低く鳴らすことができるだけだったが、人に聞かせるのでないから、それでたくさんだった。それにいまはだれも聞くものなんかなかった。ほかのものはいま教室にこしかけて、地理の授業を受けているのだ。彼ひとりだけが休んでのんびりしていられたのだ。彼はみんなを追い越してしまったのだ。みんなはいま彼の下になっているのだ。彼はアウグストのほかには、友だちもなく、彼らのつかみあいや遊びごとをおもしろがりもしなかったので、みんなからさんざんいじめられた。だが、いまは、のろまな連中や足りない連中は感嘆して彼を見送るのだった。彼はみんなをひどくけいべつし、口をゆがめるためにちょっと口笛をやめた。それから糸をまき上げてみると、針にえさがまるでなくなっているの、笑わずにはいられなかった。カンに残っていたバツタを放してやると、バツタはふらふらしながら不承不承短い草の中にはいりこんだ。そばの皮なめし場では、もう昼休みだった。食事に帰る時間だった。

P39 ~ 44

#### [コメント]

街一番の優等生であった主人公ハンスが入学試験に合格した直後の夏休み。ドイツの自然の美しさの中で心身ともに解放される様子がよくわかる。ドイツ文学の巨匠ヘルマン・ヘッセの代表作の一つ「車輪の下」の中に数多く出てくる自然と精神の融合の描写。ゆっくりと味わいたい。

— 2012年9月19日 林 明夫記 —